

お絹さまがお亡くなりになった、と尾之江おのえじんぼち甚八しんぱちに報せたのは、嫂あによめの奈津なつ乃だつた。

「まことですか！」

道場から帰宅したばかりの甚八は、裏返った声を上げた。そのままふらふらとよろめいた。三和土たたきにへたり込んだ。息がでなかつた。

ご冗談でしょう、と嫂の言葉を笑い飛ばすことはでなかつた。

甚八は立ち上がるうとした。腰から下の力が入らない。また尻餅をついた。息が苦しかった。あえいだ。

——お絹どのが、亡くなられた。

嫂の姿が揺れて、揺れて、そして揺れて、何度も揺れた。

やがて嫂の姿形も、眼の前から揺らめいて消えていった。

——甚八さまは、やはりお変わりになりませんか。

一昨日、最後に聞いたお絹の声。

いつになく物静かだったが、それでいてやはり透き通った声——耳朶にはつきりと聞こえる。

少し微笑んでそう言うお絹の双眸の奥底に、甚八は、どこか黒々とした重い石のようなものを見つけた。

——あのと看、言葉をかけるべきであった。

甚八は三和土にうづくまつた。

「おおおおう」

甚八は、人目も憚らずに泣いた。お絹のために泣いた。

遠くに嫂の声を聞いたような気がした。

甚八は気づいていた。あのと看のお絹が、背負いきれないほどの昏い何かを負っていたことに。そして、自分が、あえてお絹に手を差し伸べることをしなかつたことに。甚八は、殊更にお絹に背を向けた。わざと、その眼を見ぬようにした。

それ以上を考える余裕などありはしなかつた。

甚八の脳裏に浮かぶのは、まつすぐに、どこまでもまつすぐに相手の瞳の奥を見

て話す、お絹の微笑む面影だけだった。

一刻あまりも、甚八の鳴咽は続いた。

甚八の剣は、荒れた。

道場内には、緊迫した空気が濃密に漂っていた。

尾之江甚八に対する、能見清之介の気迫もまた、尋常ではなかった。のみせいのすけ

能見の籠手をかわし、体を入れ替えた。二人は離れた。その距離、およそ三間。しばし、にらみ合いが続いた。甚八は青眼に構え、いつぼうの能見はゆつくりと八双へ竹刀を移した。

れっぽく  
裂帛の気合い。

動いたのは清之介だった。甚八は竹刀を振り下ろした。が、次の瞬間、清之介の竹刀が甚八の胸をしたたかに打った。激しい痛み。甚八の体は宙を飛んだ。壁に叩きつけられた。道場の床に仰向けに倒れた。しばし天井を見上げた。視界は揺れていた。

「そこまで!」

道場主、養老又十郎の声が道場に響き渡った。門弟たちが、甚八に駆け寄ってくるのがわかった。

甚八は片手を挙げて、彼らを制した。

全身のあちらこちらの痛み能耐えながら、ゆつくりと立ち上がる。まだ眩暈がした。

「もう一本……」

かすれた声で言った。

「そこまでだと申した。おい、尾之江を隣の部屋へ運べ。布団がある」

数名の門弟たちが駆け寄ってきた。彼らを振り払おうとして、またしても甚八は道場の床に倒れ込んだ。

涙がにじむ。その向こうに、見下ろす清之介の姿がかすんでいる。

「甚八、引いたな」

答えられなかった。唾を飲み込んだ。

「俺のほうか、もつとみじめになる」  
すぐさま清之介の姿は消えた。

——見抜かれていたか。

わざと竹刀に打たれたことに、清之介ほどの剣客ならば、気づかぬはずがない。  
おのれの愚かさに、また眼前がにじんだ。

「あとで藤澤町の『あき』へ行こう。ま、おまえが歩けるならば、だがな」  
声だけを聞いた。

能見清之介は、お絹の許嫁いいなすけであった。祝言を直前にして許嫁を喪った清之介の  
悲哀は、察するにあまりあった。

尾之江甚八、能見清之介、そしてお絹の兄である栗本源之丞の三人は、同い年で  
あり、幼いころからの友人同士だった。

もつとも、清之介と源之丞の家は、それぞれ百五十石、二百五十石取りの上士だ。  
二十石取りの尾之江家とは、家格が違っていた。

しかし、若い彼らは、それぞれの家柄など考えることもなかった。道場では、三  
人とも、一心不乱に汗を流した。三人はいつしか、養老道場でも将来を囑望される  
存在となっていた。

はじめてお絹と出会ったときのことを、甚八は明瞭に覚えている。

今から五年ほど前——甚八はまだ十六歳。残暑厳しい秋だった。お絹は、十二歳  
になつたばかりであろうか。

道場からの帰路、甚八、清之介、まだ源九郎と名乗っていた源之丞の三人は、他  
愛もない話に笑い合っていた。

「暑くてかなわん。冷たい茶でも飲んで行かんか？」

との源九郎の誘いで、甚八と清之介ははじめて栗本家の門をくぐった。

——これが、二百五十石取りの家か。

甚八はみすぼらしい我が家を思った。顔には出さず、卑屈に笑った。

ひろびろとし、それでいて細やかに手入れされた庭に面する部屋に通された。広く枝を伸ばした松の木がひとときわ目立った。

庭に見とれていたとき、襖を開けて茶と菓子のかきつけた盆を持って現れたのが、お絹だった。

色黒で、男の子と見まごうばかりだった。

「兄上、一つ頂戴します」

と言いながら、すでに羊羹の一切れを手にしたお絹に、

「こら、絹おなご。女子が何をするか」

源九郎が慌てて一喝した。が、その声の底には、妹への愛情の響きがあった。

「あら？ どうして、そんなに殿方は偉いのかしら？」

いつぼうのお絹は、口をとがらせた。そして、その口に一切れの羊羹を放り込んだ。

思わず清之介が吹き出したことを、甚八は覚えている。

「絹も男に生まれとうございました」

言い捨てて、乱暴に襖を開けて部屋を出て行った。

「たかが羊羹一切れで……いやあ、お転婆娘で困る」

顔を真っ赤に染め、肩をすぼめて恥じ入る源九郎の姿——それがまた、微笑ましくも滑稽だったことを、甚八は覚えている。

しかし、それから一年少々過ぎたころ——お絹が十三を過ぎたころ——まるで人が変わったかのように、所作も面立ちも体つきも、すっかり女らしくなった。

そのころから、甚八も清之介も、お絹の存在を強く意識するようになった。何かとかこつけて源九郎の家へ立ち寄った。が、目的の半分はお絹と会い、とりとめもない話をする事だった。甚八は、ただそれだけでよかった。

そのようなときですら、お絹の甚八や清之介への立ち居振る舞いは、十二のころとほとんど変わることにはなかった。

養老道場での稽古の帰り道、甚八と清之介の気持ちを知っているのか知らぬのか、

しばしば、

「冷たい麦湯でも飲んで行け。この暑さだ。家に帰り着く前に倒れるぞ」

笑いながら源九郎は、二人を彼の家へ誘った。無論、遠慮する理由など、なかった。

そして、栗本家に招じ入れられれば、必ずお絹が現れた。

お絹は、いつもよく笑った。

あれはいつのときだったか——お絹に訊かれたことがあった。

「甚八さまは、齒でもお悪いのですか？」

「あ、べつに、齒はいたって丈夫ですが……」

すると、お絹は、笑みを浮かべた。

「何か、お茶に入っていたでしょう？」

「いえ、何も？」

「まことでございますか？」

無邪気にお絹は甚八の顔を覗き込んだ。

甚八は、意味もなく庭の松の樹へ顔を向けた。自身でも、上気しているのがわかった。

今のお絹は、野原を駆け回った子ども時代とは違う。すでに歳も十五だった。

「何か悪戯をなさいましたな、お絹どの？」

「ずけずけと遠慮なく言うのは、清之介だった。甚八には、逆立ちしても真似ができませんでした。」

「はい、甚八さまのお茶だけに、入れておきましたもの」

口をとがらすようにして、お絹は言った。

次の瞬間、うろたえた様子で源九郎が膝立ちになり、身を乗り出した。

「き、絹、何をした？ 子細によつては、妹といえど——」

「ああ、怖い怖い。確かに絹は入れました。甚八さまのお茶だけに、『苦虫』を」

そう言うや否や、はじめて会ったときの十二の少女のように、袖で口を隠すことなどせず、笑い出した。

「絹、おまえというやつは……」

源九郎は畳の上にへたりこんだ。叱りつけるその顔もまた、笑みで緩んでいた。甚八の隣では、清之介が腹を抱えて笑いながら、切れ切れに言った。

「お絹どの、残念無念ながら……この甚八、洒落のわからん朴念仁です。きつと今ごろ『苦虫』は、甚八の胃の腑で暴れ回っておるでしょう。それに気づかぬのが、哀しいかな、尾之江甚八という男です」

部屋は、若者たちの笑い声で満ちあふれた。

独り、笑いものにされた形の甚八ではあつたが、それは苦痛ではなかつた。

お絹の笑顔はうつくしかった。お絹の笑い声は耳に心地よかつた。

「絹、もう下がれ。あとは男の話だ」

源九郎が言うとお絹は形の整つた唇を尖らせた。その歳には、すでに紅も塗つてはいるはずだ。甚八にはその赤さがまぶしかつた。

「ああら、いつもいつも兄上は、『男が、男が』とおっしゃいますが、その兄上は女子から生まれたのではなかつたかしら？」

「こらつ、口の減らんやつだ」

源九郎の一喝に、お絹はちらつと舌を見せて、部屋から去つて行つた。

「困つたものだ。あんな調子で嫁に行けるのか」

大げさに源九郎がため息をつく。

「いやいや、存外に、あのように気の強い人を嫁に欲しい、という男……いや、家があるかもしれんぞ」

「なんだ、それはおまえのことか？」

清之介は答えずに大口を開けて笑つた。

甚八は、部屋から去る瞬間のお絹の姿を思い返していた。襖を閉じる直前に、ほんの刹那、甚八に向けたお絹の笑みに、気づかなかつたわけではなかつた。

が、もはやお絹の笑みを、二度と見ることはできない。

「今日はすまなかつた」

甚八は徳利を清之介に差し出した。

「いや、手酌でやろう」

二人がいるのは藤澤町の小料理屋「あき」の座敷だった。

甚八のような下級武士、しかも次男坊がそうそう入れる店ではなかった。城に近いこともあり、客は侍ばかりだった。甚八がまれに行く笠取町の店とは大きく異なる。あちらでは町人も下級の侍も同じ店で飲み、しかも、二階に客を上げるようなところだった。比べるまでもなく、格が違った。

「つまらぬ真似をしてしまったな」

すると清之介が盃を空にし、言った。

「わかっておったぞ」

「うむ、確かに隙を作った。許せ」

甚八は盃の酒をなめた。酒に強いほうではない。飲もうと思えば飲めるのだろう。が、酒乱の気があり母をよく泣かせていた亡父の姿を思い起こすと、飲む気が失せた。格段、酒というものを美味だと感じたこともない。

「それもあるが……お絹どののことだ」

「お絹どの?」

甚八は口まで持って行きかけた盃を置いた。

「気づかぬと思うか。俺の眼は節穴ではないわ」

甚八は盃を指先でもてあそんだ。

「おまえも、お絹どのを好いておったであろう」

「そんなことか……」

甚八は、盃から手を放し、鯛の刺身に箸を伸ばした。

「おまえはいつもそうだ。ここぞというときに、逃げる。剣と同じだ」

「逃げた覚えなど、ない」

この店の魚は、いつも新鮮で美味かった。が、今の甚八に味は感じられなかった。

「おまえはそう言うだろう。しかし、子どもの時分から、おまえはいつだってそうだ。必ず、ぎりぎりのところで一步引く。切羽詰まったとき、必ず引く——勝てる

ことを知りながら、だ。悪い癖だ」

「何の話だ？ お絹どのは、おまえの許嫁だったではないか。引くも何も、二十石の次男坊が、なぜ前へ出られる？」

清之介は盃を空けた。そして、にらみつけるような眼を甚八に向けた。

「お絹どのは……おまえのことを好いておった」

「な、何を言うか」

甚八は盃をあおった。喉が焼ける。手酌で二杯目を注ぐ。すでに爛徳利はほとんど空になつていた。すかさず清之介が手を叩いた。店の者が姿を現すと、酒の代わりを注文した。

「飲んでばかりいないで、食べたらどうだ？ 体に毒だ」

「もつと毒をあおりたいわ」

清之介は沈んだ声で言い、いらだつた仕草で鯛の刺身に箸を突き刺し、むさぼるように喰った。

「馬鹿なことを。それより、源九郎——源之丞はどうだ？ さぞや気を落としているだろうな」

代わりの徳利が来た。清之介はすぐさま自分の盃に酒を満たし、あおった。

「ああ。が、そろそろ登城し始めたらしい。城内で会ったことはないがな」

さらに清之介は盃を重ねた。

三人の關係に急な変化が訪れたのは、昨年はじめのことであつた。

源九郎の父、源之丞が卒中で倒れた。二十歳になつていた源九郎は、すぐに妻を娶つた。もとより二百五十石の家柄だ。縁談に不自由はしなかつた。しかも、娶つたのは次席家老、勝屋勘解由かつやかげゆの縁戚にあたるという。それからふた月とせず、父親の源之丞が没した。源九郎は家督を継いで源之丞を名乗るようになった。

それから、三人の仲が疎遠になつたのは、自然のなりゆきでもあつた。正確に言えば、いつまでも部屋住みの甚八と、城中で立派に役目をこなす二人とのあいだに、明瞭で深い溝ができた——少なくとも、甚八はそう思つていた。

「一昨日だったか、四十九日の法要があつたと聞いたが……」



甚八が言いかけると、清之介が遮るように口を挟んだ。

「顔は出しておらん」

清之介は徳利に手を伸ばし、盃を満たすとすぐに空けた。

お絹の死は、あまりにも突然のことだった。栗本家では内々で葬儀を済ませた。いずれにせよ、甚八が顔を出せるような場ではなかった。

「しかし清之介、おまえはお絹どのと……」

言い淀んだ。

清之介は眼を伏せて、盃をあおった。

「俺は呼ばれなかった」

「またも、か？」

甚八もまた、盃を酒で満たした。飲み干した。熱い液体。胃の腑へ落ちてゆく。

「もはや俺は栗本家の縁者ではない、とのことだろう」

清之介は盃を重ねた。

「しかし、解せん。まるで……」

言いかけ、甚八は口をつぐんだ。

清之介には聞こえなかった様子だった。清之介に聞かせたくなかった。

——まるで、お絹どのの死を隠しているかのようだ。

実際、お絹の死因について、詳らかにされてはいなかった。急病で倒れ、医師を呼びに走らせたが、医師が着いたときにはすでに事切れていたという。

——あのとき、お絹どのの……

亡くなる二日前、甚八はお絹とぼったり出会っていた。

嫂の内職である籠作りの手伝いにも飽いて、釣り竿と魚籠を片手に、龍之尾川へ向かう途中だった。場所は、高弓町の商家が並ぶ通りから、一本南に入った人通りの少ない道だった。

まだ若い侍が、昼間から仕事もせずに釣りに向かう姿——できれば誰にも見られたくない。

が、あろうことか、お絹と会ってしまった。

「甚八さま」

声をかけてきたのはお絹のほうだった。ちょうど、櫻庭神社の鳥居の下だった。

「や、これは……」

甚八は口ごもった。今さら、釣り具を隠すわけにもいかない。

いっぽうのお絹も、思いがけず甚八と会い、動揺している様子だった。

「釣りですか？」

「いや、いい陽気ですな……」

甚八は頭を掻いた。

雲一つ見当たらない快晴だった。楠の枝からの木漏れ日が、透き通るようなお絹の顔に微妙な陰影を投げかけていた。

まるで人形のように顔色が白く、そしていささか面やつれしているように見えた。

「いかがなされた？ お風邪でも召されましたか」

「いいえ……」

答えるお絹の声は小さかった。

「いよいよ、来月でござるな」

甚八は、曖昧に空を見上げた。

「『おひつる』だなんて……甚八さまらしい」

はじめて、かすかな笑みがお絹の顔に宿った。

甚八は、動悸を覚えた。

——もう、清之介のもとへ嫁ぐ人なのだ。

穏やかならぬ思いを振り払い、甚八は言った。

「清之介は、このところ、いささかはしゃぎ過ぎですな。稽古がおろそかになっております。昨日も後輩から二本も取られました。が、こんな折も折、養老先生も清之介を叱るわけにもいかず……清之介は果報者だ、と道場内ではやつかみの声ばかりです。それにしても、お兄上と清之介が、ますます遠くなるような思いがします。私のような軽輩の次男坊にも、早く婿入りの口があればよいのですが、なかなか……」

甚八は、ただお絹の顔を見ないように、ふたたび頭上の楠の枝を見上げた。

「甚八さまも、たまにはお話しになるのですね」

甚八は口をつぐみ、正面からお絹の顔を見た。

「いや、これはお急ぎのところ、失礼しました」

甚八は一礼し、そのままお絹の脇を通り過ぎようとした。

もう二度と、この人と親しく言葉を交わすことは叶わぬ。その思いが甚八を饒舌にしていた。それを見透かされ、無性に恥ずかしくなった。

「甚八さま」

「何か？」

振り向きざまに言い、甚八は胸を衝かれるような思いをした。

祝言を前にした十七の娘の、明るく浮き立った面持ちではなかった。何かしら、暗くて重いものを負うた者だけが見せる顔だった。

「いかがなされた？ ご気分でも……？」

「いえ……甚八さま、人は、変わるものでしょうか」

それは問いではなかった。

「清之介のことなら、ご心配無用でござる。情に篤く——ときとして篤あつすぎますが——正直で決して嘘のつけぬ男であることに間違いござらん。お絹どのと清之介の縁談が決まったと聞いて、心底安堵しているのです」

甚八が言うと、お絹がぼつり、と独りごちた。それは、甚八の聞き間違いかもしれないなかった。

「甚八さまは、やはりお変わりになりませんね」

お絹は深々とお辞儀をし、甚八も礼を返した。内心では狼狽していた。

甚八は、歩き出したお絹の背中をしばし見つめ、最後に聞いた言葉を反芻していた。

しかし、甚八はお絹に背中を向けた。いつまでもお絹を見つめることを、自分に許さなかった。

甚八は、自宅へ戻る道を足早に進んだ。もはや、釣りなどどうでもよかった。

「起きんか、甚八」

不意に体を揺すられた。

「おまえが先に酔うてどうする。さして飲んでおらんだろう」

眼を開いた。眼の前に、真つ赤な清之介の顔があった。

眠つてはいなかった。

「酔うておらん。一杯くれ」

「おう、その心意気だ。今日は、俺にとことんつきあえ。勘定は心配するな。今宵、飲まずにいつ飲む？」

いつの間に用意したのか、清之介が突き出したのは湯飲みだった。そこへ、徳利から、なみなみと酒が注いだ。

甚八は一気に半分ほど飲み干した。

——なぜあるとき、お絹どのに声をかけられなかったのか。

いや、答えはわかっていた。お絹にもわかっていた。

——甚八さまは、やはりお変わりになりませんね。

そう、俺は変わることできぬ男だ。

「おう、いい飲みっぷりだ。久しぶりに笠取町に繰り出すか」

笠取町で飲み直す、という意味ではなからう。あの町には多くの遊郭が建ち並んでいる。

「遠慮する。そんな気分ではない」

「固いの、おまえは」

その刹那、何か甚八の脳裏で一閃するものがあつた。

——あの日、なぜお絹どのが、あんなところに……

栗家の一人娘であるお絹が侍女も付けず、たった独り、人けの少ないあの道を歩いていたのは、いったいなぜなのか？

お絹の瞳の奥にかすかに見えた、あの黒々とした闇は何だったのか？

五日後のことだった。

夕餉ゆうげの際、珍しく兄の新左衛門が「甚八」と呼んだ。仲の悪い兄弟ではない。が、やはり甚八にはつねに「厄介者」という意識が働いていた。祖父の代から使っている老僕の儀助と一緒に、いつも台所で食事を摂っていた。嫂の奈津乃は「遠慮せずに同じ部屋で」と言う。が、やはり甚八にはできなかった。

「おまえの養老道場に、居合つかいを遣う者はおるか？」

「居合つかい、ですか？ 我が道場は〈無明流むみょうりゅう〉ですよ。護りの剣です」

「わしが剣法に暗いことはわかっておるだろう」

兄の新左衛門も、若いころに道場に通ったことがあった。が、まったく言っていないほどのものにはならなかった。その代わりと言うべきか、学問の才には恵まれた。もつとも、わずか二十石取り、普請組で、日々、泥まみれになり、人夫を差配している現在、兄の学問の才は、到底、生かされているとは言い難かった。

「聞いておらんか、昨夜、古砥町ことで人が斬られた」

「古砥町ことで？ それはまた、穏やかではありませんな」

古砥町といえば、城に近く、上士の屋敷が並ぶ町だった。

「あくまでも噂だがな——無論、わし程度のところには噂しか入って来んが——居合つかいの遣い手が一太刀で斬つたとのことだ。斬られたのは医者だ。私闘とは思えん。かといって、浪人者の強盗でもないらしい。それで、辻斬りなどと物騒な話を持つ上がったのだろうか……」

「医者？」

甚八の背筋を、冷たい何ものかがそつと触れたような感覚があった。

「おまえさま、お食事中にそんな話はおやめくださいませ」

嫂の奈津乃がたしなめた。

「あ、うむ、そうだな。すまぬすまぬ」

婿養子でもないのに、嫂の奈津乃には頭が上がりぬ、優し過ぎるほどの優しさを持っているのが、兄であった。

「兄上、斬られた医者というのは……？」

「斬った張つたの話は終わりだ。おまえも、少しは学問をせんか。これからは、刀よりも頭がものを言うときだ。おまえもいつまでも——」

いつもの説教が始まりそうだった。嫂の奈津乃が、ちら、と夫を加勢するかのよ  
うに、甚八を見た。が、あえて甚八は食い下がった。

「斬られた医者は、何と申す名だったのか、お聞きですか？」

「おまえもしつこいの。斬られたのは、石……そう、石鎚某とかいう医者だ」

急に寒気を感じた。

いしづちしょうはく  
——石鎚昭白。

昨日、甚八はその名を聞いたばかりだった。

栗本家に呼ばれ、お絹の亡骸をはつきりと見たはずの医師の名だった。

甚八は理由を付けて内職を怠り、家を出た。嫂の奈津乃は何も言わなかったが、  
もしかしたら察するところがあったのかもしれない。

上士の屋敷がずらりと並ぶ古砥町。その一角、栗本家の前で、甚八は待った。  
たかは知れていたが、もつとも小綺麗な着物を着て、黒板塀の陰にずっと立ち続け、  
栗本家を見張った。

そして昨日、使いに出了た下女——名はようと言った——の一人に眼を付けた。ま  
だ十二、三であろう。その後を追い、隙を見て背後から声をかけた。怪訝そうな下  
女に向かつて、徒目付配下の者であることを匂わせた。

下女のおようは激しくおびえた。が、そのおびえた様子から、甚八は、お絹の死  
が普通ではなかったことを確信した。

「石鎚先生を呼べ」

蒼蒼な顔の源之丞が、下男に命じて使いに走らせた姿を、おようは目撃していた。

「お絹どのの姿を、おまえは見えていないのだな？」

おようは、震えながらうなずいた。

「石鎚昭白どのが到着したときには？」

「すでに……手遅れだと……」

おようは震え出し、ついには泣き出した。

「泣くな。人目がある。今日、わしと会ったことは決して口外せぬよう。おまえの名は出さぬゆえ、心配するでない」

甚八は、おように一分銀を渡した。ほんとうの目付であれば、そんなことはしないだろう。が、おようは小粒を押し頂くようにして、逃げるように甚八の前から走り去った。

しばし甚八は曇った空を眺めて立ち尽くした。

——お絹どのは、病死ではなかった。

しかも栗本家は、お絹の死の真相を隠さなければならなかった。

——石鎚昭白に会わねばならん。

そう思った矢先のことだった。

能見清之介が鋭く面を狙ってきた。甚八はかわした。鼻先に、宙を切る清之介の竹刀を感じた。次の瞬間に、甚八は清之介の左籠手をしたたかに打った。

「まだまだ、もう一本！」

清之介は言った。その声には、前回立ち合ったときよりも、張りが戻っていた。

清之介も立ち直りつつあるようだった。

逆に、それが甚八には胸苦しかった。

——俺は、友を裏切っているのか？

その思いが剣にも表れていた。今日はすでに五本中、三本、取られていた。

そのときだった。道場内にざわめきが起きた。

若い門弟たちが道場の入り口に顔を向けていた。甚八と清之介も、思わず一度顔を見合わせ、同時に入り口を見やった。

現れたのは、栗本源之丞だった。

源之丞が道場に姿を現したのは、およそ半年ぶりであろうか。すっかり憔悴しきった面持ちだった。

甚八は、苦い唾を飲み込んだ。

「おお、源九郎。案じておつたのだぞ」

額の汗を拭いながら、清之介が昔の名で呼び、笑顔で歩み寄った。

「案じておつたのは、こつちだ。おぬしには……」

「養老先生にご挨拶は済んだのか？ ならば、稽古を見て行け」

源之丞の言葉を遮り、清之介は言った。

「いや、今日は、久しぶりに剣を振りたくなつてな」

源之丞——かつての源九郎は、甚八や清之介よりも小柄で、華奢な体つきだった。

しかも、色白で、まるで役者のように整った顔立ちをしていた。

しかし、今の源之丞は、十ばかり歳を取つたように見えた。

清之介は、道場を見回すと、大声で呼ばわるように言った。

「本日、道場における者は運がよいぞ。養老道場の『龍虎』、栗本源九郎——いや源

之丞と、尾之江甚八の試合に立ち会えるのだ！」

「馬鹿を申せ、清之介。ただわしは剣を振りに来ただけだ」

「それではつまらん」

諦めたように源之丞は短く息を吐くと、甚八を向いた。

「甚八、相手を頼む」

甚八が籠手を着けようとすると、

「木剣でやろう」

すでに源之丞は木剣を手に、二度、三度と感覚を確かめるように軽く振った。

「よかろう」

甚八も木剣を手に取った。

門弟のあいだに、ただならぬ緊張が走つたのが感じられた。いつのまにか静まり返り、壁際に寄つて、二人の剣士を取り囲んでいた。

甚八と源之丞は、ともに木剣を青眼に構えた。三間ほど、離れている。

そのまま、しばらく変化しなかった。

〈無明流〉は、護りの剣——「待ちの剣」だ。相手が仕掛けてくるのを、待つ。



甚八は、おのれが冷静に源之丞と、その木剣を見つめていることに気づいた。

甚八は、ゆつくりと——見えるか見えないか、という速さで、剣先を右へ動かした。

源之丞が打ち込んできた。甚八には読めていた。わずかに体を捻る。同時に源之丞の木剣を打った。源之丞の手から木剣が飛んだ。床に落ちた木剣は、中程から折れていた。

「参った」

源之丞は汗だくになり、道場の床に、どう、と腰を落とした。

「大分、なまっておるな」

甚八は、妙に冷やかな気持ちで言った。

「門弟たちに無様な姿を見られてしもうた。もう一本、いや三本。今度は竹刀でな」  
二人は竹刀を手にした。防具は、着けていない。

結局、三本のうち、二本を甚八が勝った。一本は、源之丞に右の籠手を許してしまった。

汗みずくになりながら、道場の隅に座った。門弟たちのざわめきの声が否応なく耳に入ってきた。いずれも、感嘆の声だった。

息が上がっていた。稽古不足とはいえ、栗本源之丞の剣はかつての鋭さをさほど失っていないかった。

視界に影が落ちた。見上げると、能見清之介の姿があった。

「また、引いたな。悪い癖だ」

「道場の『龍虎』などと、下らんことを……」

「嘘ではない。どうだ、一杯やらんか、源九郎も交えて。無論、やつのおごりだ」  
甚八は清之介を見上げた。その屈託のない表情に、甚八の胸裡には懐かしい思いが甦った。

三人で、ただ純粹に竹刀を振るい、汗をかけた日々——わずか、三年ばかり前のことだ。

源之丞を見ると、やはり額からしたたる汗をしきりに手拭いでこすっていた。甚

八の放った右の胸がかなり効いている様子だった。ときおり、片手で打たれた右脇腹を押さえ、眉間に皺を寄せている。

「清之介、居合いの遣い手を知らんか？」

甚八は小声で訊ねた。

「居合い？ 城下には、木部道場というのがあるな。〈孟宗流〉といったかの。他に居合いを遣う道場はないと思うが……それが、どうかしたのか？」

「いや」

甚八は思案した。石鎚昭白を斬ったのは、何者なのか。

道場を出たときにはすでに暮れ六つを過ぎ、辺りはすっかり暗くなっていた。

清之介の提案で、上士たちの集まる藤澤町ではなく、かつて道場帰りに寄り道した笠取町へ向かうことにした。

すぐに赤い提灯が見つかった。下士も来れば町人も来るという、安い居酒屋だった。「さくま屋」といった。間口は狭いが、奥行きがある。まさに、うなぎの寝床といった店だった。

三人は、わずか二つしかない座敷の一つに腰を落ち着けた。

そこそこに美味しい酒と、それなりに美味しい肴が、次々に並べられた。

「以前、道場にいた小池八衛門を覚えておるか。つい五、六日前だったか、子どもが生まれたそうさ。男子でな、えらい喜びようだ」

清之介が焼き魚を口に放り込んで言った。

「そうか、小池には、もう嫁がおったのか」

甚八も焼き魚をつついた。

「そういえば、昔、小池と殴り合いをした阿部だがな、来年、江戸詰になるそうさ」  
源之丞は山菜の白和えを上品に箸で口に運んだ。

盃を傾けながらの、毒にも薬にもならぬ話に、三人は花を咲かせた。

ちょうど、数年前のように。

ただ純粹に心底から笑い、ときには真面目に剣法や藩政について語り、ときには

「愚痴をこぼし合ったところ——若き、いや、幼きというものか。

胸底のどこかに冷めたものを抱えながら、甚八は酒をなめた。

三人が居酒屋を出たのは、九つを過ぎたころだった。

夜気が肌寒かった。

何とはなしに、三人は龍之尾川へ向かった——幼いころから、つい数年前まで、何度も何度も歩いた川沿いの道。

誰からともなく、河原へ下りた。砂利を踏みながら、揺れる水面に映る笠取町の灯を眺めた。

「懐かしいの。昔はここいらを三人で歩いたものだ」

口を開いたのは清之介だった。かなり酔っている様子だった。ろれつが回っていない上、足取りがおぼつかない。

「四人だ」

甚八はつぶやいた。清之介と源之丞の耳に、その言葉が届いたのかどうか、それはわからない。

かつて、幼かった甚八たち三人に加え、お絹もまた兄にくつついて現れた。

夏には、甚八らは着物を脱ぎ捨て、禪一丁になり川に入って泳ぎを競った。お絹が「あたしも泳ぐ」と言い出し、甚八と清之介が慌てたこともあった。

ある秋の日には、三人で釣り糸を垂れたときもあった。お絹が退屈そうに甚八や清之介にしきりに話しかけ、「女子に釣りはわからん」と源九郎が突き放した。お絹は怒り、膝の上まで着物をまくり上げると、川のなかにじゃぶじゃぶと入り、釣りの邪魔をしたこともあった。

「十四日か。宵待月がまぶしいわ」

ろれつの怪しい声で源之丞が言った。

「おう、われら、みなでこんな月を見上げたときもあった。あれは、まだ十八か、九のころだったかの」

源之丞以上に、相当酔っている様子の清之介と一緒に、甚八は東南の夜空を見上げた。明るい月だった。

その瞬間だった。

背後から不自然な風——刀を抜いた。

同時に下段からの敵の凶刃。跳ね上げた。強い気合いの乗った重い刃。すぐさま上段から斬り下げた。かわされた。甚八は月を見たばかりで、闇に眼が慣れていなかった。眼前は、漆黒の闇。青眼に構えた。すぐさま相手の第二撃。かろうじて体をかわした。

——居合いの剣。

闇のなか、うごめくものがかすかに見えた。「うつ」とうめく源之丞の声が耳に届いた。

「源九郎！」

呼びかけた。斬られたのか。漆黒の闇に包まれた河原には、何も見えなかった。何かが、闇のなか、動いた。

「甚八、危ない！」

清之介の声が聞こえたが、姿は見えなかった。

月の光に照らされ、白刃が閃いた。打ち合う音。散る火花。眼に映った。清之介と打ち合ったようだった。一瞬後、うごめく刺客の気配は消えた。

甚八は剣を八双に構え直した。暗闇のなかへ、あえて力強く、一步前に踏み出した。草履が河原の砂利を踏みつけた。

激しい殺気。押し寄せてくる。

やはり下段からの一撃。半足引いた。擦り上げてくる刃。空を切った。八双から打ち下ろした。鈍い手応え——斬った、と感じた。が、殺気は消えていない。

甚八は青眼に構え直した。徐々に闇に眼が慣れてくる。

眼前に、黒い塊のようなもの。じりつ、と近づくのが見えた。殺気は消えるどころか、いや増していた。間合いは近すぎるほど、近い。

下段からの一撃。

見切っていた。寸前かわした。斬り下げた。深々と斬った感覚があった。

黒い塊が、河原の砂利の上に倒れた。

甚八は、大きく息を吐いた。

「源九郎、清之介！」

呼びかけた。

「斬ったか？」

「近寄ってくるのは清之介だった。」

「ああ、怪我は？」

「大丈夫だ。くそつ、酒など飲むのではなかった。ところで、源九郎は？」

「甚八、大丈夫か……」

あえぎあえぎ、月明かりの下、源之丞が近づいてくるのが見えた。

「斬られたのか？」

甚八は訊いた。

「右腕をな。かすただけだが……情けない、刀を落としてしまった」

「命あるだけ、重畳」

清之介が言った。が、甚八は、源之丞の腕からしたり落ちるとす黒い血を見て、改めて胸底に冷たいものを感じた。

不意に清之介が言った。

「すまぬ、源九郎。不覚だ。酔うていなければ、一太刀で斬り捨てておったのに」

苦々しげに、清之介は言い、「うつ」と口を押しえると川べりへと駆けて行った。

清之介は吐いているようだった。

甚八は、はじめて自分がまだ抜き身を下げていることに気づいた。懐紙で油脂を拭い、刀を鞘に収めた。刺客に近づいた。

見たことのない顔だった。歳のころは、三十近いだろうか。月代は伸び、身に着けているものも、垢染みていた。無精髭を生やし、骨張った顔つき。浪人のようだった。

「どうするっ？」

源之丞が低い声で言った。

「わざわざ番屋に知らせずともよかろう」

清之介が歩み寄って来た。もとより、甚八もそのつもりだった。

「しかし……」

言いかける源之丞に向かって、清之介は低く脅すような声で言った。

「今宵、何もなかった。おまえのその傷、医者に診せても口止めするのだぞ」

月明かりのなか、源之丞はつかの間、動揺した顔を見せたが、ゆつくりとうなずいた。

三人で、浪人の死骸を龍之尾川に流した。ゆつくりと、うつ伏せになった名も知らぬ浪人の死骸が流れていった。その背中を、いつまでも執拗に月明かりは照らしていた。

——俺は、人を斬った。

いつまでも両手が震えた。止めることができなかった。

そして、ふたたび人を斬らねばならぬことを、はつきりと感じていた。

甚八は、刀を抜いた。刀身が、夕暮れの光に鈍く光った。

一度、血を吸った剣だ。いくつかの刃こぼれがあった。やむを得なかった。目釘を確かめ、鞘に収めた。

書き置きをすべきか、と思った。

苦労を重ねた兄の新左衛門にも、嫂の奈津乃にも、大きな迷惑をかけることになる。いや、迷惑どころか、尾之江家は取り潰しになるであろう。

硯の上で、墨を擦り始めたときだった。

不意に襖が開いた。甚八は慌てて振り向いた。

登城しているはずの新左衛門が、蒼白な顔をして立っていた。

「兄上……」

「徒目付の杉原さまから、使いの者が来た」

「なぜ、兄上が杉原さまに……」

「違う。おまえのことだ」

甚八は、眼を閉じた。一昨日の浪人との斬り合いが、明らかになったのであろう。

まさか、先にこのときが来るとは思っていなかった。

「兄上、実は——」

が、新左衛門の返答は、意外なものだった。

「能見清之介とは、昵懇の仲と聞いておるが」

「は、はい、確かに」

「栗本源之丞とは、同じ道場に通っておったな」

「源九郎、いや、源之丞と清之介は、確かに親しい友です。二人に、杉原さまから何かお咎めが……?」

新左衛門の返答はわざと感情を殺すようだった。

「能見が、栗本を斬った」

「な、なんですと……」

甚八は絶句した。あえいだ。

——清之介も、気づいたのだ。

お絹の死に源之丞が直接関わっていることに、そしてまた、先日の刺客は源之丞自らが放った者であることに。そして、自ら手傷を負ったように見せかけたことに、清之介もまた、甚八同様に気づいたのだった。

昨日、甚八はふたたび古砥町でおように会っていた。後ろから呼びかけると、振り向いたおようは顔を真っ白にした。

甚八はつとめて冷静を装い、おようを茶屋に連れて行き、半ば脅すように、問い糾した。

やはり、おようは知っていた。

お絹が、自害したことを。

懐剣で喉を突いたという。すぐさま、懇意にしており、屋敷も近い石鎚昭白を呼んだが、すでにお絹の息はなかった。

源之丞は修羅のような形相で、お絹の自害を秘すことを屋敷内の者たちに命じた。さらに、おようは、嗚咽しながら、切れ切れに甚八に告白した。

お絹が喉を突いて血みどろで倒れているのを最初に見つけたのは、千代という下

女だった。その千代が、いまわの際のお絹の言葉を聞いたという。

お絹が自害した翌日、千代は暇を出され、実家に戻された。

お絹の最後の言葉——甚八は、それを聞いた次の刹那には、源之丞を斬る決意をした。

「わたしにも、吟味があるのですね」

「違う。おまえにとつては、もつとつらく、厳しいことかもしれぬ」

新左衛門は眉間に皺を寄せた。どこか、その双眸は哀しげに見えた。

新左衛門に促されるまま、ただ甚八は玄関へ出た。まるで雲の上を踏むかのような思いだった。

——清之介が、源九郎を斬った。

つまり、甚八は先を越されたのだ。まさに四半刻前には、自ら栗本の屋敷に向向き、源九郎を斬ろうとしていたのに。

「杉原さまの命に従うかどうか、おまえに任せる。わしに言えるのは、それだけだ」  
玄関先に駕籠が待つていたのに、甚八は当惑した。

その脇に立っている細身の侍は、徒目付、杉原佐門の使者であろう。わざわざ甚八に向かつて一礼し、「どうぞ」と言った。

甚八は、杉原佐門がおのれに求めていることを、そのときに悟った。

「助太刀はご無用に願います。能見は、わたしが斬ります」

甚八は、年嵩の二人の討手に、頭を下げた。二人とも、城下の道場で劍客として知られている者とのことだった。一人は中肉中背の若い土肥どいという男——  
〈等眞流とうしんりゅう〉の遣い手だとのこと——、もう一人は長身瘦軀、〈一想流やなせ〉を遣う柳瀬  
という四十がらみの男で、井筒道場で師範を務めていた。

襷を掛け、鉢巻きを締めた。

能見清之介は、八つ刻のころ、同じく非番であった栗本源之丞の屋敷を訪れた。

奥の座敷で、清之介と源之丞はしばし話をしていたという。

半刻ほどたったころ、怒号とともに、刀の打ち合う音が二度、三度聞こえ、抜き



身を下げた清之介が座敷から現れた。畳の上には、源之丞がうつ伏せに倒れていたという。

すぐさま、栗本の屋敷は取り囲まれた。屋敷に仕える下僕や下女たちは、みな外に出された。今では能見清之介ただ一人が残っているという。

「栗本の屋敷には、何度も参ったことがございます。屋敷内の様子は、よく存じておりますゆえ、わたしが先に入ります。後詰めをよろしくお願い申し上げます」

土肥、柳瀬の二人とも不満そうだったが、甚八の言葉には理があった。

甚八はゆつくりとした足取りで、栗本の屋敷へ踏み込んだ。

廊下は薄暗かった。

甚八は、迷わず奥の座敷へと向かった——幾度も通った廊下。

開け放たれた襖の向こう、畳の上に源之丞が倒れていた。

そのかたわらにひざまずいた。合掌した。

改めるまでもなかった。源之丞は、一撃で右肩から斬り下げられていた。

——甚八さまは、やはりお変わりになりませんね。

不意に、最後にお絹に会ったときの言葉が耳の奥に甦った。

「源九郎、おまえは、変わったのか？」

甚八は、源之丞の亡骸に向かってつぶやいた。

「そうよ、変わったのだ」

不意に声が聞こえた。

いつしか庭に、能見清之介が立っていた。左手に徳利を提げている。やや頬が赤らんでいるのは、すでに飲んでいるのだろう。

「まさか、とは思ったが、おまえが討手とはな。どうだ、飲むか？」

清之介はかぶりを振った。

「なぜだ？」

「それはわしのやったことか、それとも源九郎のやったことか？」

「両方だ」

「訊かんほうがいい。さあ、早くおまえはおまえの仕事をしろ。ただし、わしも手を抜かんぞ」

甚八は、足袋裸足のまま、庭に下りた。

振り返った——畳の上の源之丞の亡骸。

「やはり、一杯もらおう」

甚八は手を伸ばした。清之介は、表情を変えずに徳利を差し出した。甚八は受け取った。一升徳利はかなり重かった。そのまま徳利の口から、二口飲んだ。

能見清之介は、大儀そうに庭石に腰を下ろした。

甚八は、徳利を清之介に返した。

「お絹どのは自害だった。源九郎はそれを内密にし、お絹どどの手当に駆けつけた医師の石鎚昭白は、刺客に口を封じられた。あの刺客は——おそらく浪人だろうが——間違いなく、源九郎が雇った者だ。俺が知っているのはそこまでだ」

吐き出すように、甚八は言った。

清之介の表情は変わらなかった。徳利からごくぐりと酒を飲んだ。

「美味しい。さすが栗本の家だ。いい酒が台所にあったわ」

「はぐらかすな。何を知った？ なぜ、源九郎を……」

ゆつくりと、清之介が立ち上がった。その白眼は酒精でやや充血していたが、冷静さを失うほどではない、と甚八は悟った。

甚八は清之介に、ゆつくりと歩み寄った。清之介は警戒しなかった。甚八は清之介の手から徳利を引きちぎるように取ると、あおった。

熱い液体——胃の腑へ落ちてゆく。

「なぜ……なぜ、俺はおまえを斬らねばならんのだ？」

徳利が清之介に奪われた。それだけの隙を見せていたのだ。が、甚八はされるがまま、立ち尽くしていた。

「わしが斬らねば、おまえが斬っていた……そうだろう？」

甚八は言葉を失った。

ほんのわずかな差で、二人の立場はまったく逆転していたかもしれなかった。

甚八は、庭の玉砂利に視線を落とした。そのまま、つぶやくように甚八は言った。

「お絹どのが自害されたことには……源九郎が関わっておるのだろうか」

清之介が充血しつつある三白眼を甚八に向けた。

「それ以上、言わせるな」

清之介が、徳利を脇に置いた。

甚八は、刀の鯉口を切った。

清之介の顔には、静かな笑みが浮かんでいた。左手をゆつくりと柄に置く。そのままの姿勢で、清之介はつぶやくようなかすれ声で言った。

「お絹どのは、清之介に穢けがされたのだ」

急激に口のなかが乾くのを感じた。

「源九郎は、けだものだ。彼奴きゃつは狂したのだ」

清之介は吐き捨てた。

清之介は、淡々と、彼が源之丞と直接談判して聞き知ったことを、語った。

清之介とお絹の婚礼が決まったところから、源之丞の胸底にある毒蟲——と、源之丞は言ったという——のような闇が蠢蠢き始めた。

妹であるお絹を、一人の女として見る眼を得てしまったのだ。

そして、ついにその毒蟲は、源之丞の心を支配した。

役目を終え、同輩と下城したあと、幾人かで藤澤町で酒を飲んだ。

酔った源之丞が帰宅したのは、すでに四ツを過ぎていた。毒蟲は源之丞を暗闇へと引き込んでいた。

源之丞は、すでに寝入っているお絹の寝所の襖を開けた。手を伸ばした。お絹の口を押さえた。布団をはがした。

「言うな！」

甚八は、おのれの声が裏返っていることに気づいていた。

「お絹どのは、翌日には屋敷を飛び出して行方知れずとなり、屋敷では大騒ぎとなった。が、そのままお絹どのは夕刻には戻って来たそうだ」

あの日、甚八と会った日、お絹の双眸の奥に見えた闇の正体が、ようやく知れた。

あまりにも残酷なものだった。

——甚八さま、人は、変わるものでしょうか。

お絹の声。お絹は、おそらく自死する場を探し求め、城下町を彷徨い歩さまよいでいたのであろう。

源之丞は変わってしまった。そして、その場で甚八と偶然にも出会った。出会ってしまった。お絹は死に場所を失ったのだ。そして、屋敷へと戻った。

——兄上は、鬼になりました。

それが、下女のお千代が聞いたという、お絹の遺した最後の言葉だった。

「おまえは鬼を斬った。が、藩命だ。俺はおまえを斬らねばならん」

甚八は白刃を抜き放った。

清之介も、ゆつくりと刀を抜いた。

「わしとの婚礼が決まり、彼奴は狂うたのだ。血を分けた妹を手籠めに——」

最後まで聞かず、甚八は一撃を放った。清之介は素早くかわした。甚八の刃はかすりもしなかった。

「聞きとうない！」

「わしも、話しとうなかったわ！」

二人は、ともに青眼に構えた。にらみ合った。

道場で、竹刀や木剣で何度も立ち合った。互いに打ち合い、互いに怪我をし、ときには昏倒することすらあった。

あのころには、源九郎もいた。たとえ血を流すような稽古になろうと、そのあとには笑い合い、相手の剣法を茶化し合った。笠取町で酒を飲み、くだを巻いた。

あのころとは、違ちがうのだ。

視界がにじんだ。

「馬鹿者め、泣くな！ 泣いては立ち合いにならないか！」

清之介の怒号。が、その清之介の頬も、すでに涙で濡れていた。

「源九郎を斬って、ただでは済まぬことはわかっていただろうに。なぜ武士なら武士らしく、おのれの始末を付けなかった？」

あえぐように甚八は言った。

「言い訳にしか聞こえんだろう。が、先に斬りかかって来たのは彼奴だった。気づいたとき、わしは源九郎を……友を斬っていた。こいつのためなら代わりに死ぬる——そう思うておった友を、わしは斬ったのだ」

清之介の声も震えていた。

二人は、互いに青眼に構えたまま、互いの姿を見合った。

甚八の視界は、ますますにじんだ。清之介の姿がいくつにも重なって見えた。

「泣くな、甚八！ 臆したか！」

「おまえこそ泣いておるではないか、清之介！」

頬を濡らしながら、二人は対峙した。

じわじわと、清之介が左に動き始めた。それに合わせ、甚八も左に動く。足袋裸足なので、庭の玉砂利が食い込んだ。が、痛みは感じなかった。

風を感じた。と同時に、凄まじい気合いとともに清之介が斬り込んできた。かろうじてかわした。が、左の二の腕を斬られた。

体を入れ替え、二人は対峙した。

甚八は、青眼のまま、待った。

斬られた左腕から、生暖かいものが腕を伝い落ちるのを感じた。

清之介がゆっくりと剣を八双に構え直した——それでも、待つ。したたる血。

甚八は、剣先を徐々に右へ傾けた。

清之介が、半足だけ、間合いを詰めた。

一瞬の後、八双からと見せかけ、上段から一気に斬り下げて来た。甚八は逆に踏み込んだ。右手だけで剣を振った——確かな手応え。同時に、右脇腹に痛み。

ふたたび、二人は体を入れ替えた——ともに青眼の構え。

しばし、甚八と清之介は、互いの濡れた瞳の奥を見合った。

先に庭に膝を着いたのは、甚八だった。

「今日は、引かなかつたな。これが、道場の秘剣『不知夜』か」  
かすれた清之介の声が聞こえた。

「うむ……」

かろうじて、甚八は答えた。

機が満ちたのちも、さらに待つ。そして、相手の懐に跳び込む、相討ち覚悟の剣——不知夜。道場では、甚八だけが師範の養老又十郎から伝授されていた。

かすれゆく意識のなか、清之介の声が聞こえた。

「なぜ、わしらは斬り合わねばならなかったのか。お絹どのも、決して、喜んではおらぬだろうに。なぜだ、なぜなのだ……？」

清之介の声は、もはやほとんどささやきに近かった。

「わからん。俺も……おまえを斬りとうなかつた。許せ……清之介」

あえぎながら、ようやく甚八は答えた。

「甚八、泣くな……討手がおまえで、よかつた」

その言葉と同時に、能見清之介の体が、どう、と庭に倒れ込んだ。

足音が聞こえた。後詰めの土肥と柳瀬が、しびれを切らして駆け込んできたのだらう。

甚八はゆつくりと立ち上がり、空を見上げた。すっかり暗くなっていた。

——甚八さまは、やはりお変わりになりませんね。

はるか遠くに、お絹の声を聞いた。

東の空には、満月を過ぎた十六夜じゅうろくにゃい——不知夜の月が上り始めていた。

尾之江甚八は、天空を仰いだ。泣いた。